

妖しの京 ～愛蓮奇譚～

宇宙 星来

「うふふ」

漆黒の闇に、楽しげな女の音が響く。

「もうすぐ、もうすぐだわ」

染み出るように闇から現れたのは、毒々しい色香を持つ尼僧。

それは都に恨みを持つ女術者蓮香こと、白蓮尼その人であった。

そのまま白蓮尼は水鏡を覗き込む。

水面に映るのは、白蓮尼の邪魔をする陰陽師の姿。

「もうすぐで、私の復讐が叶う……」

水鏡に手をかざすと、陰陽師の姿が遠のき別の姿に変わる。

現れたのは目鼻立ちの愛らしい少女。妖に囲まれても動じず、明る

い笑みを浮かべている。

水鏡の中、陰陽師と少女は幸せそうに会話をしていた。

「さあ、私の邪魔をし続けていた陰陽師様」

白蓮尼の唇に、楽しげな微笑みが浮かぶ。

「貴方は、愛しい女性が消えた時、どんな絶望を味わうのかしら……」

……」



平安の都を、細い月が照らし出していた。

「昭昌！」

いつものように散歩をしていたらしい瑠璃と昭昌が遭遇したのは、

まだ子の刻に入るかどうかといった頃。

満面の笑みで駆け寄る瑠璃に、昭昌は苦笑する。

「また散歩か？」

「うん、それに、最近昭昌にも会えなかったし」

さみしかつた、と微笑む瑠璃に、悪いな、と昭昌も返す。

「仕事がちよっと忙しくて。これから、しばらく少納言様の邸に泊ま

る事になったし、また会えなくなる」

「それもお仕事？」

「ああ」

昭昌は陰陽師だ。大陰陽師安倍晴明の子孫であり、再来と言われる

ほどの力を持っている。

それゆえ、まだ年若くとも大貴族に重用され、忙しいのだと瑠璃は

知っていた。

知ってはいしたが、さみしいのはどうしようもない。

「そっかあ……」

しゅんと俯く瑠璃に、一匹の兎が体を擦り付けて甘える。まるで自

分がいるよと言っようように。

よくよく見ればその兎は全身を漆黒に染め、目は金色に輝いている。

普通の兎には無い色彩だ。

それもそのはず、この兎はただの兎ではなく、れっきとした妖であ

る。

この平安京の闇に巣くう無数の妖。その妖を見る力を、鬼を見ると

書いて見鬼と呼ぶ。

瑠璃も見鬼であり、妖を友と呼んでいる。

見鬼は妖に襲われやすいが、瑠璃の周りの妖はみな気のいい雑鬼達だったため、これまで襲われかけても逃げ切る事が出来ている。

もちろん、夜に出歩くなど本来は見鬼でなくとも年若い女性がしている事ではない。

しかし妖と常に行動し、なおかつ昭昌がなるたけ一緒にいられる夜には、こうして散歩していた。

「慰めてくれるの？」

兎を抱き上げ、瑠璃は笑う。太陽のような笑顔に、昭昌も釣られて微笑む。

昭昌が陰陽師になると決めたのは、こんな風に出歩く瑠璃と出会ったから。

妖を恐れず、堂々と顔を晒す不思議な少女。最初こそ驚いたものの、すぐに仲良くなつて。

もしも悪い妖が瑠璃を狙つても、ちゃんと守れるようになりたい。そんな思いから、昭昌は陰陽師になる事を自ら選んだ。

そうして、今、瑠璃は明るく笑っていてくれる。

それだけでいい、と昭昌は思う。ずつとこうして過ごしていきたい。そうどちらかとも思いながら、別れの時間はあつという間にやって来る。

「それじゃあ、また」

瑠璃を邸まで送り届けると、昭昌はその足で少納言邸へと向かった。ほんの少しさみしさを抱き、瑠璃もその背を見送った後邸に戻った。



最近なにかが一の姫を脅かしている。そう依頼されてからというものの、昭昌は毎夜少納言邸に足を運んでいた。

しかし、昭昌がいるのがわかるのか怪異は一向に起こらない。それでも確かに邸を取り囲む邪念を感じ取り、昭昌は気を抜かずに見回りを続けている。

そんな日々もあつという間に過ぎ、気がつけばもう満月までわずか。あれ以来、瑠璃に会っていない、と昭昌は目を伏せる。

考えてみると、こんなに長い事会わなかったのは久しぶりだ。

「会いたいな……」
声が聞きたい。笑顔が見たい。

今すぐ抱き締めたい。

「瑠璃……」
名前を呟くだけで、心が熱くなる。

何もかも放り出したい気持ちを抑え込み、大きな深呼吸を繰り返す。この件に片がついたら、瑠璃に自分の気持ちを告げよう。昭昌はそう心に決めていた。

「昭昌様……？」
不意に御簾越しに声をかけられ、昭昌は姿勢を正す。

「まだ眠っておられなかったのですか、一の姫」
「ええ、寝付けなくて」

あつさりと御簾をくぐり、一の姫は顔を晒す。天真爛漫な性格で生

生きると活動的な性格の一の姫には、御簾は窮屈らしい。

好きなようにさせてくれと少納言から頼まれているのもあり、初めこそ少々戸惑ったものの今はすっかり慣れてしまっていた。

「昭昌様には本当に迷惑を……」

「これが仕事ですから、お気になさらず」

少納言の一の姫、美代子。達筆の持ち主であり、ゆくゆくは東宮妃の女房になるのではないかと最近噂の的である。

顔立ちも綺麗で整っており、すでに求婚者が押しかけている。

今回の事は、女房の件か求婚者の件のどちらかが大本なのだろう、と少納言も昭昌も睨んでいた。

そろそろ痺れを切らして敵が現れるだろう。

どちらが原因にせよ、相手もそろそろ限界のはず。

遅くとも数日中に次の襲撃があると踏み、昭昌は今夜泊り込む予定で邸を訪れていた。

「さみしい、なあ……」

満ちてゆく月を眺めながら、瑠璃はぼつりと呟く。

「昭昌、まだお仕事終わらないのかなあ……」

もう何日も昭昌に会っていない。

さみしい、さみしい、会いたい。

その思いが胸の中で膨れ上がって、やるせない気持ちになる。昭昌を思うと胸がきゅうつと切なくなつて、会いたくてたまらなくなつた。

「この気持ち、なんなんだろう……」

「その気持ちの名前は、恋と言ふのよ」

答えが無いはずの問いかけに答えた、女の声。同時に瑠璃の鼻腔を甘い花の香りが掠めていく。

間違えようも無い、蓮の香り。この香りを持つ女を、瑠璃は一人しか知らない。

「蓮香……!」

「こんばんは」

呻くような瑠璃に対し、暗闇から現れた女は艶やかな笑みを湛えたまま瑠璃を見つめる。

瑠璃の親友を、東宮の思い人を、鬼にしようと画策して都を滅ぼそうとする女術者。

緋色の僧衣が鮮血のように毒々しく、女の白い肌に映えていた。

警戒を解かぬ瑠璃に、女はにこやかに微笑んだ。

「どうぞ、白蓮尼とお呼びになつて。私は悩める女性に真実を教えに来たのよ」

「真実……?」

そう、と白蓮尼は手をかざす。

「信じる信じないは、貴女の自由。私はただ、真実を見せて差し上げるだけ」

手のひらに見る見る水滴が集まり、やがて円を描いて水鏡のように手のひらで渦を作る。

「どうぞ、ご覧になつて?」

じりじりと後ずさつていた瑠璃は、ちらりと水鏡を見た後驚いた顔になつた。

水鏡に映るのは、他ならぬ昭昌の姿。

「昭昌!」

怪我をした様子はない。元気そうな様子にほつと胸を撫で下ろし、しかし次の瞬間瑠璃の顔が強張る。

共に映った、見知らぬ少女。親密そうに語り合う姿。

胸がきりきりと締め付けられ、喉の奥に熱い塊が込み上げる。

その人は、誰？ どうしてその人に笑いかけているの？

震える手で、首飾りを握りしめる。

私と同じ名前の石。昭昌がお守りにと買ってくれた。これがある限り、何も不安になる必要は無い。

ずつと、そう思っていたのに。

「よくよく御覧なさい。貴女の思いに、この方は相応しいかしら…」

切れ切れに漏れる二人の声と映像を、食い入るように見つめる瑠璃。その姿を見て、白蓮尼は満足そうな笑みを浮かべた。



取り留めの無い会話を交わしていると、不意に美代子がこう訊ねた。

「昭昌様には、大切に思っいらっしゃいますか？」

その瞬間、昭昌の脳裏に浮かんだのは、微笑む瑠璃の顔。

「……ええ、とても。とても愛しい人が、います」

「まあ、どんな方ですか？」

問う声に、昭昌は目を細める。

「彼女は優しく、いつも明るくて。時々無茶をするから、危なっか

しくて目が放せなくて。私が怪我をすると泣くほど心配してくれて」

大切な友達のためなら夜中に歩き、自分の身の安全よりも友達を優先するような性格で。

雑鬼を友と言ひ、そして、ほんのささやかな事でも嬉しそうに笑う。

繋いだ手はとてもあたたかくて、小さくて。

「私が陰陽師になったのも、これから生きていくのも、全部、本当は彼女のためなんです」

妖をも受け入れるその心を。太陽のようなその笑顔を。

愛しくて、守りたくて、そのために力を欲した。

「彼女を護りたいから、私は陰陽師になったんです」

周りの期待など関係なく、己の意思で陰陽師になると決めた。そう、

希代の大陰陽師と呼ばれた安倍晴明を凌ぐほどに、強くなりたいと。

「彼女のすべてを愛しいと思う。ずつと傍にいたいと願う。出世などしなくていい、ただ、彼女と生きられるなら、私はそれ以上何も望みません」

「……本当に、昭昌様はその方を愛していらっしゃいますのね」

私もそんな恋をしたい、と美代子は微笑む。

「色々と求婚はされておりますけど、私はまだどなたにも嫁ぐつもりはないのです」

内緒ですよ、と悪戯っぽく笑い、美代子は遠くを見つめる。

「権力など、私は知らない。お前は私がお前の母様を愛したように、お前を愛してくれる殿方と結ばれて欲しい。お父様は小さな頃から私にそう言い聞かせてくださいました」

だから、その人に巡り逢うまでは誰のものにもならない。そう微笑む美代子に、一瞬瑠璃の笑みが重なる。

本当は時々泣き出しそうに苦しいくせに、それでも自分の意思を貫

く強さが垣間見える微笑み。

今頃、瑠璃は何をしているのだろう。

遠く思いをはせ、暗い空を見上げる。

抱き締めて、ぬくもりを感じたい。

いつの間にかこんなにも大きくなった、瑠璃への思い。

「昭昌様……」

心を彼方へと向ける昭昌の様子に、美代子は父の姿を重ねる。

母のみを愛し、母の話の最中よくこんな顔をしていた。

昭昌はその人に会いたいのだ。でも、今は私のためにその人に会えないでいる。

そう思うと申し訳なくて、美代子はそっと目を伏せた。

「……そうだ、一の姫。女性は何を貰うと喜びますか？」

唐突に声をかけられ、はっと顔を上げる。

昭昌はいつものように穏やかに微笑み、けれど視線は彼方を見つめたままだった。

「彼女に、贈り物をしたいです」

「まあ……」

そういう事ならと美代子は微笑み、奥からいくつか小箱を持ってきた。

「そうですね、文と一緒にこういった櫛や髪飾りなどいかが？」

美代子は鈴のついた髪飾りを手に取る。色鮮やかな彩絹に結ばれた鈴は華やかで、美代子によく似合っていた。

「ああ、あなたによく似合いますね」

瑠璃にあげるなら、萌黄や薄紅の淡い色が似合いそうだ。鈴ももつと小さくて、澄んだ青色のものがいい。

どんなものがいいだろうかと、あれこれと見せてくれる美代子の手

元を覗き込んだ。

昭昌は知らない。

そのやり取りの全てを、瑠璃が見ていた事を。



「ほうら、ね？」

にこやかな白蓮尼の言葉に反応もせず、ただ瑠璃は水鏡だけを見つめ続ける。

『ああ、あなたによく似合いますね』

間違いない、昭昌はそう言った。

受け取った女の子も嬉しそうに頷き、昭昌も微笑み返している。豪華な着物、立ち振る舞い、きつと大貴族の姫君なのだろう。

……私より、ずっとお似合いよね。

下級貴族の姫より大貴族の姫の方が、経済的にも将来的にも昭昌のためになる。

昭昌は、陰陽師。それも次期帝と噂される東宮にも重用されるほどの、素晴らしい陰陽師。

大貴族の姫との縁組があっても、おかしくはない。

ああ、だけど。だけどね、昭昌。

「……好き……」

昭昌が、好き。

私だけを見ていて。他の女の子に微笑みかけたりしないで。

そう願ってしまう、私がいるの。

頭では理解してるの。大貴族の姫を選ぶのが、昭昌のためだって。

でも、心が、魂が泣き叫んでる。

昭昌が好きだと気づいてしまった。だからもう、これまでのようにはいられない。

「あ……き、まさ……！」

水鏡に波紋が広がる。瑠璃の瞳から溢れた雫が、次々に水鏡を揺らす。

二人の姿が歪んで消え、水鏡が泡となつてはじける。しかし、瑠璃はそのまま動こうとはしない。

「私の、言つた通りでしょう？」

白蓮尼は、甘く囁いた。緩慢な動きで、己を見つめる瑠璃の瞳を覗き込み、幼子に言い聞かせるように語り掛ける。

「彼の心に貴女はいないの……」

感情の無い瑠璃の瞳に映る己の姿に満足しつつ、白蓮尼は鼠をいたぶる猫のごとくじわじわと瑠璃の心を壊していく。

「貴女がどんなに彼を愛しても、それは所詮無駄なこと。辛いでしょう、哀しいでしょう……？」

だから、と白蓮尼は笑う。

「私の手をとつて、少しお休みなさいな。私は貴女を救いたい」
そうして差し出された白蓮尼の手を見つめる。

この手を取れば、救われる？ 昭昌の事も、姫の事も、今は考えなくていい……？

それは今の瑠璃にとつてあまりにも魅力的な誘いで、抗うには傷が

深すぎた。

瑠璃はしばし逡巡した後自らの手を重ねる。

「そう……いい子ね」

もたれかけさせるように腕を引くと、するりと首飾りが外れる。同時に瑠璃は意識を失い、そのまま腕の中に崩れ落ちた。

「……ふ、ふふ、あはははははっ！」

静寂に笑い声が響く。

「これでもう彼女は私のものよ」

白蓮尼はどこからか紅い蕾を取り出すと、瑠璃の胸に押し当てる。それは吸い込まれるように瑠璃の胸に消え、すぐに紅い花が咲いた。

それは、血のように紅い大輪の蓮の花。絹のようにすべらかで弾力のある花びらに触れ、白蓮尼は満足そうに呟く。

「恋にやぶれた者の絶望に咲く花、哀しみの緋蓮花。この花の根はすでにこの子の心と心臓に定着している。下手なことをすればこの子も死んでしまう……」

さて、と白蓮尼は嘲笑う。

「貴方はどうするのかしらね？ 都をとるか彼女をとるか見ものだわ……」

高らかな嗤笑が響くと共に、二人の姿は闇に溶ける。後にはただ、瑠璃の首飾りだけが残っていた。



「……っ？」

不意に昭昌は息を詰めた。

何か大切なものを失ったような、凄まじいまでの喪失感に襲われ、訳がわからぬまま嫌な予感に眉をひそめる。

「昭昌様？ どこか、具合でも？」

「いえ……」

心配そうに見つめる美代子に首を振ったその時、耳障りな叫び声が響いた。

はっと目を開き、心を空っぽにして声の主を探す。

ただならぬ昭昌の様子に、美代子も体を強張らせる。

「あ、昭昌様……」

「大丈夫です。私が、お守りしますから」

美代子を奥に隠し、昭昌は一人静かに簀子に立つ。

やがて邪気を撒き散らしながら現れたのは、細長い体のいたちに似た妖。

まっすぐに美代子の居場所を狙って飛び上がる妖に、素早く刀印を結んで障壁を築く。

阻まれた妖は空中で体勢を立て直すと、今度は昭昌に向かって襲い掛かった。

避けきれず、鋭利な爪が腕を引き裂く。痛み顔に顔を歪めつつ、それでも昭昌は妖を再び阻んで体制を整えた。

「呪いはあるべき場所へ！」

拍手と共に昭昌の声が響く。

「戻るがいい、ここはお前のいる場所ではない、元の主の元へ戻れ！」
宙に素早く五芒星を描くと、その印は妖の額に命中して白煙をあげる。

そのまま逃げ去る妖には見向きもせず、昭昌は邸に結界を張り巡らせた。

「これで、もう一の姫が襲われることは無いでしょう」

「あれは逃がして大丈夫なのですか？」

恐る恐る訊ねる美代子に、心配ないと昭昌は頷く。

「呪詛を返しましたから、今頃術者にはそれ相応の報いが下っていることでしょう」

「ああ、ありがとうございます！」

「さすがは安倍昭昌殿！」

聞きつけて現れた少納言や家人が次々に昭昌を褒め称える。

しかし昭昌自身は先ほど感じた嫌な予感がまだ消えない事に不安を覚えていた。

「それでは、私はそろそろお暇させていただきます」

「昭昌様、本当にありがとうございます。どうぞ、昭昌様が愛する方と幸せになられますように」

一の姫からの感謝の言葉を背に邸を出る。

空の月は満ちる直前でどこか不吉。そして、より一層嫌な予感は強くなっていく。

「なんだというんだ……！」

焦燥感にかられ、直感が命じるままに都を駆ける。そして、朱雀大路に出た昭昌の目には、会いたくてたまらなかつた愛しい少女の姿が映った。

「瑠璃……」

駆け寄りかきかきして、違和感に気づく。いつも瑠璃を守っている雑鬼達の姿が無い。

瑠璃もどこかを見つめたまま、昭昌を見ようともしない。

何かがおかしい、そう思った昭昌は、ほのかに甘い香りを嗅いだ。甘やかな、蓮の香り。

「お久しぶりですね、可愛い陰陽師様」

くすくすと笑いながら現れた白蓮尼に、昭昌は剣呑なまなざしを向けた。

「お前、瑠璃に何をした！」

「まあ、ひどい言いがかりですこと」

微笑しつつ、白蓮尼は親しげに瑠璃の肩に触れた。

「彼女は自ら闇を受け入れたの。貴方のせいよ？」

瑠璃がゆっくりと昭昌のほうを向く。

その胸には昭昌の渡した瑠璃の首飾りではなく、鮮やかに咲き誇る大輪の蓮の花がある。緋色に染まったそれは、今もお成長を続けていた。

「美しいでしょう？ この花は私の一族に代々伝わる最高の呪い。絶望を糧に成長する、緋蓮花。貴方のお陰でこんなにも大きくなったわ！」

楽しげな白蓮尼に肩を抱かれた瑠璃は、血の気の無い唇をゆっくり動かす。

「ど……して……」

どうして、昭昌。

「ほほほ、私達は神泉苑にいるわ、この姫を救いたくばくるがいい！」
「待ってっ！」

最後の最後、伸ばした手はほんのわずかに届かず。

「瑠璃——っっ！」

高笑いと共に吹き荒れる蓮の花吹雪の中、白蓮尼と瑠璃は姿を消した。

「……くそっ！」

思わず握りこぶしを手近な扉に叩きつける。

嫌な予感はこのれたのだ。目の前で、瑠璃が攫われた。

彼女を守るために、俺は強くなったんじゃないのか。何のため
に、陰陽師になったんだ。

自問自答を繰り返した後、素早く踵を返し、自分の邸に駆け戻る。

ぼやぼやしている暇は無い。早く瑠璃を助けなくては。

気持ちばかりが焦り、探している呪具はなかなか見つからない。

「時間が、無いのに……！」

苛立ちのままに、再びこぶしを叩きつけようとした、その時。

『落ち着け、若き陰陽師』

涼やかな声と共に、こぶしが誰かに受け止められた。

まったく気配を感じなかった昭昌は、自分がどれだけ冷静さを失っていたのかを思い知って愕然とする。

ひやりと冷たい感触に我を取り戻せば、受け止められていた手に、青い首飾りが握らされていた。

『道に落ちていた。そなたの大切な人のものだろうか？』

青い首飾り。瑠璃の。瑠璃に渡した、あの時の。ずっと瑠璃が身につけていた、あの。

震える手でそれを握り、昭昌は浅い呼吸を繰り返す。

どうしてこれがここにある？ どうして瑠璃がここにいない？

考えのまとまらぬ思考に、先ほどの出来事が浮かぶ。見開かれた瑠璃の瞳。傷つき、呆然と宙を見つめるあの瞳が、昭昌の心を深くえぐる。

「……っ！」

『落ち着け』

呼吸がうまく出来なくなる昭昌に、落ち着いた声がかげられる。

『ゆっくり呼吸を繰り返すんだ。焦らなくていい』

涼やかで少し低いその声は、乾いた大地を潤す雨のように、昭昌の心に沁み込んでいった。ほんの少し肩の力を抜き、見知らぬ声の言うままに呼吸を繰り返せば、呼吸と共にだんだんと心も穏やかに落ち着きを取り戻していく。

『もう、大丈夫だな』

穏やかな声に目を細め、昭昌は相手の顔を見ようとする。

「あなたは、誰ですか？」

そう訊ねると、その人はゆっくりと姿を現した。



遠くで呼んでいる声が聞こえた。

必死な声、大好きな声、優しい声が聞こえた。

聞き間違うはずもない、あの声は……

「……昭昌……？」

自分で呟いた声に目を開けると、そこは一面の闇だった。不思議な

事に、かざした手はほんのりと淡く輝いている。

胸にあの緋蓮花は無い。自分の姿だけが闇の中に浮かんでいるように、後は何も見えなかった。

「昭昌……」

もう一度、昭昌の名を呟く。

気づいたばかりの愛しい人の名を、ずっと傍にいてくれた人の名を。

「あき……ま、さ……」

視界が揺らいだ。滲んでぼやけて、心に闇が広がっていく。

その笑顔を他の人に向けないで。私だけに微笑んで。

ああ、なんと浅ましい願いだろう。

彼は私のものではないのに。誰に話しかけようと、微笑みかけようと、私には答える資格など何もないのに。

『そう思うのは当然の事なのですよ』

突然、瑠璃の耳にやわらかな声音が響いた。いや、耳に聞こえたのではないのかもしれない。ただその声はまっすぐに、瑠璃へ届いて心を震わせた。

『人を好きになるという事は、そういう事なのです。貴女のその思いは、恋をしている証なのです』

「……誰……？」

『堕ちないで。心の闇に吞まれてしまわないで。あの子のように……』

ふう、と目の前に若い女の姿が浮かんだ。

緋色の切袴に白い小袖、赤い勾玉と緑の丸玉を白い管玉で繋げた環を身につけ、額にも勾玉の飾りをつけている。長い髪は緩やかになびき、華奢な体を包むようだった。わずかに漂うのは、甘やかな蓮の香り。

その女の顔をはっきりと見た瞬間、瑠璃は大きく目を見開いた。

「れ……んか……？」

そう、その女は蓮香と瓜二つだった。

しかし、すぐに違う、と瑠璃は首を振る。

同じ顔、同じ香り。だが——魂が違う。

「あなたは……誰？」

「私は蓮香……」

「違う……あなたは、蓮香じゃない……」

女はさみしげに笑った。

「いいえ。私が蓮香なの……」

『私は破矢斗。姫を護る者』

暗がりから現れた青年は、そう名乗ると親しげに微笑みかけた。

袖の無い上着や足に布を直接巻きつけたような、動きやすさを重視

した衣装がよく似合う、精悍な顔立ちの青年。

見つめてくる青年の瞳が兄と重なる。穏やかでどことなく懐かしさを

感じるまなざしに、昭昌は少々警戒しつつも小首を傾げ答えた。

「姫？」

『若き陰陽師、そなたならば知っているはず。この国が天津神たる天

照大神の治める国になった経緯を。姫は天照の血を受けし天津神の血

脈にして、前にこの国を治めし神に仕え、そのお心を有めていた巫女』

天照の前にこの国を治めていたのは。そして巫女が有めなければな

らない神とは。

「まさか、まさかその神は、大國主命か？」

『正解だ』

青年が肯定するのを見て、昭昌は顔色を失くした。

大國主命、それは天照の弟たる須佐之男の子孫にして、国土を作つた出雲の祭神である。

「出雲大社で、いったい何が!？」

『違うぞ、陰陽師。姫は出雲の姫巫女にあらず。都の近く高雄山にて、

都に害がないよう裏鬼門を護ると共に大國主命に祈りを捧げる巫女

言うなれば裏斎宮だ』

焦る昭昌に訂正をいれ、最も、と青年は苦笑する。

『すでに私も姫も、この世の存在ではないのだが』

「……え？」

『私はすでにこの世に存在するものではありません』

蓮香は悲しげに微笑み、闇へ手をかざす。

『あの日から、私は時の流れにたゆたうものになりました。このまま

では歪みを生み出してしま……』

「そんな……」

『だから、貴女は闇に堕ちないで。あの子のようにはならないで。貴

女がこの闇を乗り越え、未来へ進むことを諦めなければ、私達は正し

くあるべき場所に行けるのです——』

蓮香の手のひらから光が生まれ、見る見るうちに世界を白く染めて

いく。

『あの子がどうしてこうなったのか、その全てを貴女にお見せしまし

よう——』

反転する視界に飲み込まれ、思わず目を閉じる瑠璃の耳に、蓮香の願いが届く。

……—どうか、あの子を止めてあげて——……

『あの日は新月だった』

そういうと、破矢斗は昭昌に手を差し伸べる。

『もう時間がない。俺とともに、過去の記憶を見てくれ。』「蓮香」が生まれた、その詛を』

「蓮香だっ!?」

蓮香と聞いた瞬間、昭昌の目の色が変わった。それまで持っていた警戒心や躊躇いをすべて捨て去り、迷う事なく破矢斗の手を取る。

その瞬間、視界が真っ白に染まり、破矢斗の姿も何も見えなくなっ

た。

『これから見る事は、すべて真実だ』

そう告げる破矢斗の声が、最後に聞こえた。

『蓮香』の生まれた、その詛を。



うだるような夏のある日。高雄山にある小さな集落では、いつものように宴会の準備が進められていた。

今夜は新月。新月から五日だけ、山頂近くの祈り場から、巫女が戻って来るのだ。

祈り場に入れるのは巫女のみ。他人は、たとえ親族であるうとも、入り口に行く事すら許されていない。

それまでずっと一人、孤独の中で祈り続けていた巫女への感謝として、最初の日は宴会と決まっている。

この日もいつものように、巫女を迎えるささやかな宴の準備にいそしむ人々。

その中には巫女の妹である一人の少女の姿もあった。

「藤香、ちよつと沢から水を汲んできて！」

「はい！」

少女は空の桶を手に、身軽に沢へと駆けていく。

「ほんに、巫女様も藤香ちゃんもいい子に育ったねえ」

「ご覧、あの走る様を！ 巫女様を月に例えるなら、藤香ちゃんは太陽だよ」

微笑ましそうな人々の視線に気づく様子もなく、少女は村を出て沢へと駆けていく。

さほど遠くないところにある沢で、水を汲みつつ顔を映す。澱みのない水に映るのは姉によく似た、けれども日に焼けて健康そうな色の顔。

「お姉様、早く帰ってこないかしら……」

綺麗な水を汲むには、湧き水の染み出す岸壁にしばらく桶を置いて

おかなければならない。

待っている間、手持ち無沙汰に胸元から取り出した丸玉を眺める。

高価な紫水晶で作られた丸玉は、少女の手の中でころころと転がる。これは少女の恋人から贈られた、少女の宝物だった。

「いっぱい、いっぱいお話ししたいことがあるの……」

丸玉を握り、目を閉じる様子はまさに恋をしている少女そのもの。

二月前、巫女が山に戻ったその日、少女はこの沢で一人の青年と巡り逢った。

都から来たという、身なりのいい青年。自らを敦利と名乗った青年は、水を汲みに来た少女にふもとまでの道案内を頼み、そこから二人は仲良くなっていた。

本当は、前回降りてきた時にその事を話そうとしたのだ。しかし巫女が忙しく、あまり会うことすら出来なかった。

なぜなら、巫女に護人が出来たのだ。

一人で祈りを捧げる巫女の身に何も起こらぬよう影から守る役目が守人である。その中で巫女と恋におちた若者を護人と呼ぶ。やがて巫女と護人は結ばれ、夫婦になるのだ。

今回護人になったのは、藤香もよく知る破矢斗という青年だ。巫女より二つ年かきの、村で一番強い若者。

大好きな姉をとられるようで少し複雑だった藤香も、今は二人を心から祝福していた。

「お姉様に会ったら、最初になんて言おう」

この前の宴会の席で、微笑み合って寄り添う二人はとても幸せそうだった。

いつか、自分も恋人と寄り添って、みんなに祝福されて幸せになりたい。

そう思いながら桶の水を確認しようと立ち上がった藤香は、きな臭さを感じて顔を引き締めた。

山火事だとしたら、急いで消し止めなければ大惨事になる。小規模ならば今のうちに何とかしなくては。

桶を掴み、はやる気持ちを抑えながらきな臭いほうへと駆けていく。そして、そこで藤香が見たのは、自分の村が炎上する様だった。

炎は村全体を覆いつくし、勢いよく燃え盛る。

「ど……うして……」

その場にへたり込んだ藤香の耳に、騎馬の音と人の話し声が聞こえた。

「これで逆賊は全員殺したな」

「まったく、なんてやつらだ。事もあろうに今上帝の弟君、敦利様をたぶらかすなど」

「しかも、八岐大蛇を奉っていたと聞くぞ。大妖を奉るなど、朝廷への裏切りだ！」

遠さかる音を聞きながら、藤香は呆然としていた。

「どういうこと……?」

なにかもわからなかった。ただひとつ、理解できたのは、自分が敦利と恋におちたがゆえに、村が燃えたのだ、という事。

やがて火が収まってきた頃、藤香はふらふらと立ち上がり、村へと向かう。

ところどころまだ燻る村の中、そこかしこに倒れた人々。焼け死んだ者、切り殺された者。子供を庇った親、親を庇った子供。抱き締めあつたまま死んだ恋人達。

老人も子供も関係なく殺されている。

「私の……せい、で……」

自分が恋をしたから。そのせいで村は、みんなは。

「……ふ、ふふ……あは、あはははははははっ！」

罪悪感と恋しさと現状を目の当たりにした衝撃が、藤香の心を打ち砕いた。

胸元の紫水晶を放り捨て、死体の中で狂ったように笑い続ける。涙はなく、ただその代わりに心が壊れていった。

「こ、これは一体……」

しばらくして、村の現状に愕然としながら巫女と護人がやってくる。祈り場までかなりの時間がかかるため、この村の現状を知らなかつたのだ。

そうして二人は髪を振り乱し、狂気に飲まれた藤香を見つける。

「藤香！ ああ、いったい何があつたというのです？」

妹の無事を喜び、ほっと安堵した表情で駆け寄る巫女は、藤香の狂気に気づいていなかった。

「おねえ、さま……？」

狂った藤香の目に映るのは巫女と護人の姿と、それに被って見える罪そのものの、自分と敦利の姿。

「違う、あれは、私とあの人……村をこんな風にしてしまったのは、私が……」

表情を変えぬまま振り上げた藤香の手には、鋭利な刃。

「きやあああつ！」

「姫っ！」

腕を切り裂かれた巫女を抱き寄せ、庇うように立ち塞がる護人。その二人を見ていた藤香は再び刃を振るう。

「あははは、あははははははははははっ！」

狂った吐笑があたりに響く。

巫女へと見せかけた攻撃は途中で方向を変え、守ろうとした護人の脇腹へ深く突き刺さった。

「か……は……っ！」

「……いやあああつ！ 破矢斗、破矢斗——っ！」

泣き叫び、うずくまる護人にすがりつく巫女に、藤香は残酷に告げる。

「私の邪魔をするからよ？」

にっこりと血に染まって微笑み、巫女を見下ろす。

「ねえお姉様。お姉様の体と力、私にちょうだい？」

「藤香、どうして……！」

「お姉様の力を得て、私はもつともつと強くなるの。そうして、村を焼いたやつらに復讐するのよ」

あどけなく笑いかけられ、巫女は絶句する。

「姫……お逃げ……」

「あら、まだ動けたの？」

最後の力を振り絞り、巫女を守ろうとする護人。ならば、と藤香は微笑む。

「じゃあ、あなたがお姉様を殺すがいいわ」

そう言い放った瞬間、護人の体が勝手に動く。

巫女の妹である藤香自身の持つ力も、巫女には届かぬがかなりのもの。

死に掛けた人間を操る事など造作も無かつた。

「やめ、ろ……っ！」

命に関わるほどの出血にもかかわらず、護人は突き刺さったままの刃を抜き、そのまま巫女に襲い掛かる。

本人の意思とは、関係なく。

「やめろおとおおおっ！」

護人の絶叫と共に、巫女の体が傾ぐ。

ふくよかな胸からはおびただしい出血。美しい瞳からは涙が零れる。

「ふ……じ、か……」

その言葉を最後に巫女は力なく目を閉じる。同時に限界だった護人の

体も崩れ落ち、そのまま二度と動くことはなかった。

藤香は巫女の体を抱きかかえ、勝ち誇った哄笑を挙げる。そのまま

巫女の胸に刺さった刃を抜き、己の胸に突き立てた。

「っ、あははははは！ これであとは復讐するだけよ！」

血を吐きながら、藤香は笑い続ける。やがて糸が切れたように笑い

声が止むと藤香の体から白いものが巫女の体へと流れ込み、それまで

微動にしまかった巫女の体が淡く光りだす。

やがてゆつくりと目を開いた巫女は、満足げに微笑んだ。

「ふふふ……お姉様の体と力、確かに私が譲り受けましたわ。今日か

らは私が蓮香……ふふふ、あはははははははっ！」

すでに血は止まり、巫女だったものはふらふらと立ち上がって哄笑

する。

そうして後には藤香だったものと護人だったものだけが残されてい

た。



『妹は、私の体と力で今回の騒ぎを起こしているのです』

暗闇に戻り、泣きながら咳く瑠璃に、蓮香は哀しげに目を伏せる。

『どうか、妹を止めてください。あなたの愛する方と共に……その方

もまた、ここにいらしてありますから』

「……え？」

すつと蓮香が示した方向から、二人の男性が連れ立ってやってくる。

その一人を認めた瑠璃の瞳から、また新たな涙が溢れた。

「瑠璃……」

同じく瑠璃を認めた昭昌は、少し戸惑いながらも瑠璃に駆け寄る。

「昭昌……」

「泣くな、泣くなよ……」

しゃくりあげる瑠璃をぎこちなく抱き締めた腕は、いつもと同じぬ

くもりで。ますます瑠璃の涙は止まらなくなる。

今まで押し殺してきた色々なものが、堰を切ったように言葉となっ

て溢れ出す。

「さみしかった、あの女の人と一緒にいるから、すごく嫌になっ

て私……」

「女の人……？」

小首を傾げていた昭昌は、美代子の事だと気づいて慌てふためく。

「違う、彼女は少納言様の一の姫で、ここのあるところ毎夜呪詛に苦しめ

られていたんだ。だから仕事で通ってたんだよ」

「でも、昭昌あの女の人と楽しそうに話したり、なんか貰ったりして

た。それを白蓮尼に見せられて、だから、私……」

うつと詰まった昭昌に、瑠璃はやつぱりと哀しくなる。

「やつぱり、昭昌はあの女の人が好きなのね」

「違う！」

「こんな、こんな事って……」

突然の大声に驚いて顔を上げると、昭昌は赤くなつてそっぽを向いていた。

「違う、から。一の姫には、その……好きな女の子に何をあげたらいいかなつて、聞いたんだよ」

好きな、女の子。

一の姫ではなかつたとしても、あらかじめ予想していても。その言葉は、自分の気持ちを自覚した瑠璃にとつてあまりにも衝撃的な言葉。

それでも、昭昌に泣き顔は見せまいと、瑠璃は必死で言葉を紡ぐ。

「……だつたら、私に聞いてくれてもよかつたじゃない！ そりゃ、昭昌に好きな人がいるとか聞いたら泣いちゃうけど、でもせめて友達として頼つてくれてもいいじゃない！」

自分で自分を追い込むような言葉を言いながら俯く。

本当に言いたいのは、こんな言葉じゃないのに。

嫌われたくなくて、どうしても、本当の気持ちと言えない。

ああ、でも、本当は。

私だけを見ていて。私を好きだと言つて。

もどかしさに唇を噛み締めて俯く瑠璃の耳に、焦れたような昭昌の聲が響いた。

「本人に聞けるかよ！」

「……え？」

ぼかんとする瑠璃を抱き締め、昭昌は耳元でささやく。

「……俺が好きなのは瑠璃だから。陰陽師になるのを決めたのも、瑠璃を守るためだし。妻にしたいって思うのは、瑠璃だけだから」

「あ……き、まさ……」

「けどどうやって伝えたらいいかわからなかつたから、一の姫に相談してた……不安にさせて、ごめん」

淡く微笑みながら、指で瑠璃の涙を拭う。

「昭昌……っ！ わ、私も、昭昌が好きな。ずっとずっと好きだったの……っ！」

「瑠璃……好きだから。誰よりも好きだから……」

固く抱き締めあう二人を見つめ、蓮香は優しく微笑む。

『もう、大丈夫ですね……』

「あつ……」

今更ながら慌てて離れようとする瑠璃を抱き寄せたまま、昭昌は二人に向き直る。

「それで、俺達はどうすればいい？」

『今のままで』

にこりと破矢斗は告げる。

『己を偽らなければ、それだけで』

『あの子は、藤香はずっと自分を偽っています。お互いを思いやる二人の気持ち、あの子の偽りを壊すでしょう。あの子は未だ、恋人を愛しているのです』

蓮香が微笑むと同時に、昭昌と瑠璃の意識が遠のき始める。

「ま、待つて……！！」

『あなた方がここで確かめ合つた気持ちを、忘れないで』

遠く近く、慈しみに満ちた蓮香の聲が響く。

『あの子が使う絶望の反対にあるのが愛の力。あなた方はもう、ゆるぎないその力を持つているのです……』

だから、けして諦めないで。

そうささやく蓮香の聲が遠のき、昭昌と瑠璃は意識を手放した。

その頃、都は阿鼻叫喚に静寂を打ち破られていた。瑠璃の絶望から生まれた緋蓮花が、更なる絶望を求めて新たな贅を探し、都中に広がりだしたのだ。

緋蓮花が道という道に溢れ出し、割れ目や隙間から家に侵入している。赤い花は自分の意思を持つかのように、また新たな緋蓮花を生み出す糧として人々に襲い掛かる。

甘い香りにぼんやりと思考を奪われてしまえば、蜘蛛の網に捕らわれた蝶のように糧となるのを待つばかり。

逃げ惑う人々の怒声や悲鳴が遠くから聞こえ、白蓮尼は満足そうな笑みを浮かべていた。

「ああ、やはり貴女は素晴らしいわ！ 私と同じ力と心を持つ貴女だから、緋蓮花もこれほど大きくなったのね」

神泉苑の清き流れを染め上げる、禍々しいまでに赤い蓮の花。その畔に浮かぶ、赤い球体のように固まって咲く緋蓮花。

その中で四肢を拘束されて目を閉じる瑠璃を見つめ、白蓮尼は蠱惑的に微笑む。

「愛なんて、一時のもの。それゆえに人は絶望するの」

どこまでも優しく甘くささやく。

「だから、愛なんて信じないほうがいいわ」

「……いいえ」

眠っているような瑠璃の唇が動いた。同時にゆっくりと目を開ける瑠璃に、白蓮尼は呆然と目を見開く。

「そんな……何故？ 何故目を覚ましたの？」

緋蓮花をここまで育てた以上、己の絶望に心を喰われてしまうはずなのに。

「私は昭昌を、信じてる」

四肢を蓮に絡めとられたまま、けれど揺るがぬ瞳で瑠璃は白蓮尼を見つめる。

「昭昌はここへ来る。私はそう信じてるわ、白蓮尼……いいえ、藤香」

藤香、そう言った瞬間、白蓮尼の瞳が揺れた。

「その、名は……」

「あなたの本当の名前は、藤香。蓮香はお姉様の名前、そうでしょう？」

どこまでもまっすぐな瞳に気圧されるように、白蓮尼は後ずさる。嫌々と頭を振り、必死に何かから逃れようとするその姿に、瑠璃は切なさを抱く。

あの日、白蓮尼が感じた絶望は、私が昭昌への気持ちを自覚したところよりも遥かに大きかったはず。

藤香は、心の底から敦利を愛していた。あの記憶の中で、敦利の事を思っていたその顔を見るだけで、理解できるほどの思い。

そして今も白蓮尼が苦しみ憎んでいるのは、愛していることの裏返し。

「藤香、あなたはまだ、愛した人のことを、忘れては」

「黙れ、だまれえええ！」

瑠璃の言葉が遮り、血を吐くような絶叫を上げる。

四肢に絡んだ蓮が生き物のように体を締め上げ、瑠璃は苦痛に顔を歪めた。

「愛してなどいない！ 裏切った、あの人は私を裏切った！ 裏切つて、みんなを、殺したのよ……」

だから、愛してなどいないの。そう俯く白蓮尼は頼るものを失った
幼子のように傍げだった。

「……昭昌は、来るわ……」

締め上げられる圧迫感に焦点がぼやける。掠れた小さな声で、それ
でも瑠璃は言い募る。

「昭昌は、来る。私は、信じてる……！」

あの夢で、蓮香が逢わせてくれた。私を好きだと、昭昌は言っ
てくれた。

それだけが、今の私の真実だから。

「来たところで、絶望するだけの事」

ゆるゆると顔を上げ、白蓮尼はいつものような笑みを浮かべる。

「その花は貴女の心臓に根を下ろしている。緋蓮花が消滅するという
事は、貴女が死ぬ事に他ならないわ」

「それでも、昭昌なら絶対何とかわしてくれるわ」

揺るがぬ瞳に射竦められ、白蓮尼の顔から微笑みが消えた。

その体から発せられる怒りや憎しみの感情に思わず息を飲む瑠璃の
耳に、よく聞き慣れた、信じていた人の声が響いた。

「瑠璃！」

白銀の狼にまたがり、颯爽と現れた昭昌。

それは瑠璃と昭昌が始めて会った夜と同じようで、けれどお互いを
知り合った時間が確かに二人にはあつて。

「……昭昌……！」

現れた昭昌に、白蓮尼は齒噛みした。

「……どこまでも私の邪魔をすと言うのね……！」

だが、その唇はすぐに釣り上がり笑みを象る。

「でも、どうやって愛しい彼女を助けるつもりかしら？ 心を開いた
のは彼女自身、緋蓮花は彼女の心に、心臓に深く根付いて一体化して
いるわ。もう外から切り離すことは出来ないわよ」

自信たつぷりに微笑む白蓮尼に、昭昌も微笑み返す。

「もし瑠璃が死んだなら、俺もすぐに後を追う。冥府への道行きを、
一人にはさせないさ」

絶句する白蓮尼に構わず、昭昌はそのまま歩み始める。

まっすぐに、裾が水に濡れるのも厭わず、ただ瑠璃の元へ。

先ほどの夢で誓った言葉を、嘘にしないために。

「瑠璃……」

少々ぐったりしつつも、瑠璃は昭昌を見て微笑む。

「昭昌……」

「遅くなつて、ごめん……」

いとおしそうに瑠璃に手を伸ばし、頬に触れる。

「さっきの事、夢じゃないよな？」

「蓮香と藤香の……」

言いかける瑠璃に頷き、頬の手を瑠璃の胸元に移動させる。

「この花が、すべての元凶だな……」

「ええ。私が、昭昌を信じられなかったから、哀しくて苦しくて……」

ひととき大きな蓮は、乱れて大きく開いた胸元で鮮やかに咲き誇る。

「……これを、無理矢理消したら、瑠璃も死んでしまう」

「私はいから、これ以上都を……」

言い募る瑠璃の唇が、柔らかくてあたたかいもので塞がれた。一瞬

だけの熱はすぐに離れ、瑠璃の目には切なげな昭昌の顔だけが映る。

「瑠璃を失ったら、俺が生きている意味はない。陰陽師になったのは、

瑠璃を守りたかったからだ。だから……一緒に生きていきたい。都を守るかわりに瑠璃を失うなんて、嫌なんだ……！」

首にかけられる、瑠璃の首飾り。昭昌が初めて贈ってくれた、瑠璃の宝物。その重さを感じ、瑠璃の瞳からゆっくりと涙が滑り落ちていく。

都をこんな状況にしたのは、白蓮尼にそのかされた自分。それでも、昭昌と一緒に生きようと言ってくれる。

「どんな罪も贖おう。どんな罰も甘んじて受けよう。だけど、それでも、願ってしまおう。」

「一緒に、生きたい……！」

昭昌と共に、ずっと。

「……愛してる、瑠璃……」

二人の唇が、そつと重なる。それが合図のように、胸の緋蓮花が花びらを落とし、ほのかに色づく薄紅の蓮が代わりに花を咲かせる。

変化は連鎖的に次々と起こり、都中の緋蓮花が散り、薄紅の蓮に変わっていく。

優しい色の花は白蓮尼の術を跳ね返した、その証。

「こ、こんな、こんなことが起こるなんて……！」

無理矢理術を跳ね返されたのではない。二人は白蓮尼の術をいったん受け入れ、そして変化させたのだ。

お互いを思いあう、その心だけで。

力に対してならばいくらでも打つ手はある。だが、心そのものに勝る力など無い。

その事を、白蓮尼は誰よりもよく知っていた。

顔色を無くしてうろたえる白蓮尼に、散った緋蓮花の花びらが鋭利な刃のように襲い掛かる。

「きゃああああああっっ！」

返された呪詛は、かけた本人により大きな力となって跳ね返ってくる。

都全体を呪った白蓮尼は膨れ上がった憎悪そのものに全身を切り刻まれ、どざりと地面に倒れ伏した。

唇を離した瑠璃は、緋蓮花の変化に目を見張る。

「昭昌、緋蓮花が」

そう言った瞬間、薄紅の蓮は光の泡のように跡形もなく消えていく。蛍のようなその光もすぐに消え、辺りを、都を埋め尽くしていた緋蓮花はその存在が夢だったかのように痕跡もなく消滅していた。

「これで、全部終わったな」

支えを失い落下した瑠璃を抱き締めながらそう呟くと、倒れていた白蓮尼が反応した。

「つく……まだ、よ……」

ふらふらになりながらもまだ立ち上がりとうとする白蓮尼。

「私は、復讐を……」

「何に、復讐したいんだ」

瑠璃が濡れないよう気をつけて岸に上がり、白蓮尼に問いかける。

「愛した男か？ この都か？」

憎悪に満ちた白蓮尼の視線を真正面から受け止める。

「お前は、本当に復讐を望んでいるのか？」

「そうだ、と即答しようとして、言葉に詰まる。」

私は都を滅ぼしたかった。何故？

「私達は、八岐大蛇を祭つてなど、なかった……」

けれど、そう思われて村は焼かれ、多くの人々が朝廷に殺された。

「私が、私が朝廷の、今上帝の弟と知り合ったから……」

私が罰を受けるならわかるのに、どうしてみんなまで殺されなくてはならなかった？

どうしてあの人に会ってしまったのだろう。

会わなければ、恋をしなければ、何も起こらなかっただろう。

「あの人を、好きにならなければ……！」

白蓮尼の頬を、一粒の涙が滑り落ちた。

空気が震えた。見た目には何も変わらぬ白蓮尼から、ただ途方も無い哀しみが溢れて大気を揺らす。

それはまるで、世界が白蓮尼に代わって慟哭しているようだった。

「白蓮尼、いや、藤香……」

昭昌はそれ以上掛ける言葉を見つづられず口を噤む。

痛いほどに伝わる、白蓮尼の哀しみ。

「……私は、私が憎い……あの人を愛した、私が憎い……みんなを死なせる原因になった、私が憎い……」

それでも、この心を消せずにいる。あの人を、好きだというこの気持ち。

憎めたらよかったのに。裏切り者と罵れば、いつそ。

でも、出来なかった。忘れようと、憎もうとしても、この思いだけ

はどうしても消せなくて。

この恋が、私をこの世に留まらせ続ける。

「どう、して」

どうして裏切ったの。どうしてみんなを殺させたの。

どうして、私に好きだなんて、言ったの。

「どうして……！」

血を吐くような問いかけに、応える者はいない。

白蓮尼のした事は、決して許されるものではない。

それでも、昭昌は白蓮尼に止めを刺せずにはいた。

ここにいるのは恋に破れた女。ただ、力を持っていたがゆえに心を歪ませてしまった。

人の心ほど、思い通りにならないものはないから。

今までしてきた事は許せない、それでも、白蓮尼だけを責める事は出来なかった。

「好きなのは、どうしようもないよね」

ふと、瑠璃が口を開いた。

「だって、私だってそうだったもの。あなたが昭昌と一の姫の姿を見せてくれたとき、この方が昭昌の出世には有利だって思っても、やっぱり好きだって気持ちが消せなかった」

「瑠璃……」

「私は見鬼以外のとりえなんてない。そう自分に言い聞かせても、心は泣き叫んでた」

昭昌が好きだと。心の一番奥が、悲鳴をあげていて。

「だから、好きだって事から、目を背けなくてもいいと思う。だって、その心は、あなた自身なんだから」

白蓮尼と瑠璃の視線が交わる。

「好きで、いても、いい……？」

「うん。だって、自分に嘘はつけない。ついたら、全部が嘘になってしまう」

瑠璃の瞳から、涙が溢れる。

「敦利を愛した、その気持ちまで嘘にはしないで」

ああ、と白蓮尼は唐突に理解した。

瑠璃を緋蓮花の宿主にしようとしたのは、昭昌を試す意味もあったが、なによりも瑠璃自身に強い力があつたためだった。でも、他にも

力を持った女性は都に何人もいる。

それでも瑠璃以外探そうと思わなかったのは、前のように探さなかつたのは、瑠璃にかつての自分を重ねていたから。

敦利を愛し、何も疑わなかつたかつての自分。だから、瑠璃ならこの苦しみをわかつてくれると、どこかで期待していた。

そうして、瑠璃は本当の気持ちを見つけて、わかってくれたのだ。あの日、歪んだ心が元に戻っていく。そして同時に、自分のしたすべてを思い出した。

「藤香……」

瑠璃がそう呼ぶ声が、蓮香の声に重なる。

大好きで優しかった姉。重い定めをその身に背負いながら、それでも微笑む強さを持った巫女姫。自慢だった美しい姉。

その幸せを奪った自分を、姉は許さないだろう。

白蓮尼は自嘲の笑みを浮かべる。
愛した村を、愛した人を、その肉体すらを、私は奪ったのだから。

……—いいえ……

微かに聞こえた声に目を見張る。

聞こえるはずの無い、やわらかな陽だまりの声。
まさか、そんな、でも。

「お……ねえ、さま……？」

震える声に応えるように、宙から伸びた白い華奢な手が頬を包む。
そのまま現れた蓮香は、記憶と変わらぬ優しい微笑みを白蓮尼に向けていた。

「おねえ、さま……」

『ああ、やっと私の声があなたに届いた……』

ふわりと白蓮尼を抱き締め、髪を優しく撫でる。
『恨んでなど、私も破矢斗もしていないわ。あなたの苦しみを救ってあげられなくて、ごめんなさい……』

姉の後ろに現われた破矢斗も穏やかな顔で頷いている。
……私は、今まで何をしてきたのだろう。

白蓮尼の瞳からいくつも涙が溢れて流れた。

懐かしい姉の声が、変わらぬ心が、白蓮尼の心を優しく包んで癒していく。

「ごめん、なさい、ごめんなさい……!」

幼子のように泣きじゃくる白蓮尼の姿が変わっていく。
今まで溜め込んでいた負の感情を涙と共に流していった後には、敦利に恋した少女、藤香の姿があった。

「ごめんなさい、お姉様……!」

『いいの、もう苦しまなくていいのよ。あなたがした事は、けして許されてはならない事だけれど、それでも私はあなたを愛している。だって、たった一人の妹だもの』

蓮香は涙を拭うと愛おしそうに語りかけ、慈愛に溢れたまなざしを向ける。

『これから、ずっと一緒にいますからね』

「お姉様……」
あどけない笑みを浮かべ、白蓮尼が蓮香を見つめる。そうして、そのまま。

白蓮尼は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

「えっ？」

呆然とする瑠璃の前で、白蓮尼の姿が見る見る変わっていく。瞬きにも満たない時間で美しいその姿は尼僧姿の白骨になっていた。

「どう、いう……？」

「白蓮尼は、もうすでに、死んでいたんだ」

昭昌が淡々と呟く。

「おそらくあの日の直後に。すでに一度死者となった蓮香の体に自分の魂を移したとはいえ、流れた血の量から見てすでに機能はしていなかっただろう。そのままの姿を保っていたのは、ひとえに霊力と思いの力だ」

「だっ……って……そんな、な……」

「自分がもう死者であることにすら、あの子は気づけなかった。そうして死霊となったまま消されてしまえば、あの子は輪廻の輪に戻る事無く消滅してしまう。だから……」

「私達は、藤香を人に戻したかった。だから、お前達に賭けたのだ。」

結果として、藤香は人に戻って逝けた。礼を言う、若き陰陽師と心優しい見鬼の姫よ」

穏やかに微笑む二人の姿がゆっくりと霞んでいく。

「私達も、もういかなければ。お二人に出会えて本当によかった。大國主命の巫女として、お二人の幸せを祈っています」

蓮香が最後にそう微笑み、寄り添う二人の姿が宙に溶ける。同時に白蓮尼の姿も灰となり、風に撒き散らされて消えた。

「そう、か」

翌日、すべてのあらましを聞いた東宮は瞑目し、しばらく無言になった。

「……敦利親王は、私と同じ年の皇子だった。母親の身分が低いため、存在はさほど知られていなかったが。多くの日々を祖母の元で過ごし、争いごとを好まぬ性格だった、と聞いている」

過去形で語る東宮。それが意味するのは。

「だが、もう彼はこの世にはいない……自害、している。話を聞くまで、理由がわからなかったのだが、おそらく自分のせいで村が焼かれたと知って、責任を取るつもりだったのだろう」

村を焼くよう命じたのは、皇子の叔父だった。自身の権力のため皇子に大貴族の姫を娶わせ東宮を蹴落とそうとし、そのために恋仲の藤香を消そうとしたらしい。

もつとも皇子が自害の際に残した遺書から策略が明るみになり、叔父はすでに極刑を受けていた。

「……藤香を、彼自身が裏切った訳ではなかったのですね？」

「ああ。それだけは言える」

そうですか、と頷き、昭昌は東宮の前を辞した。

すでに今回のあらましは陰陽寮に届けてある。帝への報告は東宮からも陰陽寮からも届けられるだろう。

とにかく今は、瑠璃にこの事を伝えたかった。



瑠璃の邸についたのは満月が中天にかかる頃。

心地よい夜風に身を任せるように、二人は實に座った。

昭昌は東宮からの話を瑠璃に話し、月を見上げる。

こうして瑠璃と共に月を見るのはもう何度目だろうか。数え切れないほどなのに、まだまだ知らないところがたくさんある。

ぼんやりとそんな事を思っていると、瑠璃がそつと微笑んだ。

「……じゃあ、二人は出会えているかもしれないのね」

瑠璃が言ったのは、ただ藤香と敦利の幸せを祈るような言葉だった。

「あの世で、輪廻の輪の中で、巡り会えていたらいいね」

一日中泣いていたのだろう、真つ赤に腫れあがった目で、昭昌を見

つめて笑う。

「ね、昭昌」

「ああ、そっだな」

思うものはたくさんある。瑠璃を利用した事は許せないし、許すつ

もりも無い。

それでも、藤香があこの世で恋人に出会えていればいいと思う自分も

いる。

一歩間違えれば、昭昌とて瑠璃を藤香のような哀しい存在にしてし

まう所だったのだから。

昭昌の脳裏を、緋蓮花に絡めとられた瑠璃の姿が掠める。

瑠璃のあんな姿は、もう二度と見たくない。

「瑠璃」

誰よりも何よりも愛しい存在の名を呼ぶ。

「改めて、言わせて欲しい」

一生、俺が守るから。

「俺の妻に、なって下さい」

どうか、傍に。

共に生き、共に笑い、これからの時間を過ごしていきたい。

そんな昭昌の言葉に泣き笑いをし、瑠璃は頷く。

「……はい」

そうして二人の影が重なり合うのを、ただ月だけが見ていた。